

特別連載 アジ研の 50 年と途上国研究

第 8 回 アジア経済の数量的実証研究の形成期

おさ だ ひろし
長 田 博

はしがき

今回は長田博氏にお話を伺い、日本におけるアジア経済の数量的実証研究の形成過程を振り返ることにしたい。

長田氏は 1948 年 1 月生まれ。名古屋大学経済学部卒業，名古屋大学大学院経済学研究科修士課程修了後，1972 年にアジア経済研究所に入所された。統計部での仕事をきっかけに，アジア諸国の産業連関表作成プロジェクトに参加した。その後，1978 年から 80 年までアジア経済研究所海外派遣員としてアメリカのイリノイ大学大学院に留学する。1981 年からはマクロ計量モデルによる貿易リンクモデル作成のプロジェクト（「経済構造予測事業」（ELSA））に参加し，84 年からはアジア諸国の景気動向指標を使った「景気予測事業」（SEPIA）プロジェクトにも参加した。長田氏はまた，野原昂氏や平田章氏等とともに「貿易と開発」をテーマにした研究会（通称「貿易研究会」）を組織し，研究成果を公刊してきた。1991 年から名古屋大学大学院国際開発研究科に所属して，現在，同研究科の教授を務める。名古屋大学では国際協力のための開発専門家志望の人たちの教育に従事している。1995 年に名古屋大学経済学部より博士（経済学）の学位を取得する。

インタビューの日時は 2009 年 10 月 16 日（金）で，アジア経済研究所で行われた。聞き手として奥田聡（地域研究センター），植村仁一（開発研究センター），および野上裕生が参加した。

（アジア経済研究所開発研究センター・野上裕生）

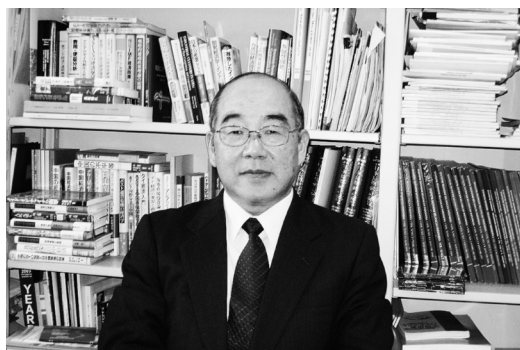
研究なども伺いたいと思います。

I アジ研に入った頃のこと

——最初にアジ研に入られた前後のお話を伺います。例えばどういうきっかけでアジ研に入ろうと思ったか，そこでどういうふうな問題意識があったか。それから，できれば大学時代のご

2 番目に，今の研究テーマを見据えるまでにどういう経緯があったか。例えば最初にこういう地域を担当して，こういうふうなことで，最初に論文をまとめたとか，若いころのご経験をお話いただければと思います。

それから，メインにやっていたらした研究につ



長田博氏（2010年9月17日 大学研究室にて）

いてもお話したいのですが、なかでもアジ研で、平田（章）さんたちと中心にやっていた貿易の研究会が大きかったと思われますので、こちら辺の話を伺えればと思います。

それから長田さんは、ずっと本務は統計部^(註1)に所属されていたので、そのプロジェクトの主要メンバーとして参加されていた時のことなどをお願いします。

また、大学に転任された後の研究活動で、大学などと比べて、アジ研はどういうメリットやデメリットがあったのかということについて、お考えがあったらお聞かせください。

それと、やはり回顧だけではなく、未来志向のことを伺いたいのので、ご自分がやってきたことを振り返って、今後、挑戦してみたい、やりたいテーマというものがあればお聞かせください。

最後に、アジ研の研究者も相当代が変わってしまって、アジ研のOB、OGが大学に勤めたときの、その教え子の方が研究者としてアジ研に随分来ているのです。すでに中堅になっている者もいるのですが、そういう若手研究者へのメッセージなども、できればお願いします。

長田 なぜアジ研に入ったかということですが、私がアジ研に入ったのは1972年。その前は名古屋大学の経済学部で、国際経済のゼミに所属していました。当時の国際経済は、国際貿易も発展途上国の研究もやるということだったので。そこで修士を修了しまして、アジ研に入ったわけです。そのころは、国際開発という言葉はまだ一般的でなく、経済発展論や経済開発論、あるいは輸出指向工業化論とか、大体は工業化の話で、今とはだいぶ開発学のあり方が違って

いる時代でした。修士2年生になり、途上国の経済発展に関することを何かやりたいと思っていましたら、指導教員がそれならアジ研というところがあると。それから、ちょうどそのころ創設されたIDCJ（国際開発センター）もある。そこを受けてみないかということで、応募しました。アジ研の試験が最初にありまして、幸い受かったものですから、IDCJは受験しませんでした。

ちょうど私が入ったころのアジ研というのは、現在の基本的な形ができあがった時期で、人数も横ばいになりつつあった時期です。博士後期ではなく修士修了ですから、具体的に何か特定のテーマを研究したいということではなくて、漠然と国際経済、貿易と経済発展に関したことができればよいというぐらいのことだったわけです。

修士論文のタイトルは、お恥ずかしいですが、昨日見返したら「テイクオフの3大条件」となっていました。結局、ロストウの本を参考に、人口問題、農業開発の問題、製造業の主導産業育成の問題という3つの条件を検討した修論です。ちょうどそのころよく読まれていた鳥居（泰彦）先生の『経済発展理論』（東洋経済新報

社 1979 年。著者は当時慶應義塾大学）という本がありましたが、これにロストウ的な先行条件期の議論，特にいろいろな制度構築の視点を加えた大きなフレームワークのなかで考えるというのが、いまだに私のベースになっている発想だと思います。

II 統計部に入って

長田 アジ研では、何となく当時の経済成長調査部に配属されるのかなと思って、4月1日の入所式に行ったのです。で、辞令を渡されまして「統計部物量バランス課」と書いてある。物量バランスとは聞いたこともないので、非常に驚き不安になりつつ、嵯峨座課長に従って統計部に向かったことを覚えています。

——物量バランスとは、I-O (Input-output table. 投入産出表あるいは産業連関表) ということだったのですか。

長田 そうです。I-O 表のひとつの原型で、各財の生産量と各部門によるその財の需要量の合計のバランス状態を示すものです。

——計画経済の発想なのですか。

長田 ええ。物量バランス表は、I-O 表の行（産出）の情報に対応します。ちょうどそのころ（1972 年）統計部で、最終需要表作成事業というのが始まっているのです。今では、このプロジェクトが始まるので採用されたのかなという感じがしています。

——そこに坂井さん^(注2)や古河さん^(注3)がすでにいらっしゃったわけですか。

長田 そうですね。そのころの統計部は長谷川さんという部長さんがいらっしゃって、その方は通産省から来られた方で、産業連関にも詳しい。統計部は統計1課，2課に分かれていたかね、その前は。ちょうど僕が入ったときには物量バランス課，統計調査課，そして電子検索課と3つに分かれていた。

統計部は、貿易統計と人口統計も担当していましたが、そこで最終需要表を始めた。坂井さんは、はっきりとは覚えていませんが、そのときアメリカにいたか、ちょうど戻ってきたかというところ。佐野（敬夫）さんもそうですが、統計部の僕たちより少し上の人たちが、アメリカの大学で勉強して戻ってきたところでした。その人たちが中心になって、新しいプロジェクトを引っ張っていったという感じです。

同時に具体的な統計調査や処理については、例えば農林省出身の山崎（茂）さんや古河さんが詳しかった。経済理論あるいは計量理論の専門家、統計データの作成・編集の専門家、それから今みたいにパソコンがない時代ですから統計データをメインフレームで処理していく専門家の共同作業としてこの統計部のプロジェクトが始まっていったわけです。

ですから、この聞きたい事項の2番目の「研究テーマをみつけるまでの経緯」や、「どのような問題や国に関心があったか」というのは、私の場合はちょっと答えにくい質問です。調査研究部などに配属されて、「私はこれがやりたいです」と言ったり、「あなたはこの辺で何かテーマをみつけてやってください」と言われる

のとは違いまして、ある意味で統計部は現業部門でしたので、「これをやってください」ということで私は入所したわけです。ですから、与えられた仕事を日々こなしていたということです。最終需要表プロジェクトは国際産業連関表プロジェクトに発展していくわけですが、僕は主にインドネシアの担当となった。ということで、その後ずっとインドネシアとの付き合いが続くわけです。

——では学生のころやアジ研に入ったころに、特定国を掘り下げていたということは特になかったということ。

長田 まったくないです。そのころアジ研では、専門の研究対象国を持つ地域研究が主流で、もうひとつの流れとして経済を分野別に切るという経済成長調査部があり、そこでマクロ経済、貿易、金融、工業、農業などを研究していた。そういう2つの大きなメインのセクションがあって、あとは動向分析があったわけですが、統計部はこれらとはまったく違う形ですね。僕自身は地域研究はやったことがないので、国際経済、貿易を専門にしたいとは思っていた。そういう意味では、経済成長調査部に近いところにいたというか、異動できたらいいなと正直思ったこともありました。

大型予算を取って、途上国にカウンターパートの機関を持って、個人ではなく機関対機関で協定を結んで、プロジェクトを実行するという方式は、国際産業連関プロジェクトが最初です。I-O表を最初作るときは、こちらもノウハウがなくて、日本のI-O表を作っている通産省の方などに話を聞いたり資料をいただいたりしま

した。それを僕たちが翻訳しながら現地の協力機関のスタッフに教えるということで、学びながら技術移転することを同時にやっていました。ただし、日本のものをそのまま移植せず、その国の事情に合わせてやり方を変えることが必要なのです。ですから、やはりその国の経済がどうなっているかを把握する力、分析する能力も必要とされたということです。

もうひとつは、国際産業連関表もそうですが、作っておしまいではなくて、分析をした。それから、この大型プロジェクトに途上国の人も含めて多くの人が協力しており、予算規模も大きいということなので、社会的要請として成果を社会に還元するというか、産業連関表をみんなが使えるように提供することが必要とされていました。

——そういったI-O表を作った時のやり方はその後も続けられていて、例えば、景気予測事業(SEPIA)をやったときも、経済企画庁の景気統計の人たちに来ていただきました。それで、タイの方やシンガポールのチャオさん^(註4)にも来てもらって、何か勉強してもらってという話ですね。だから、そういうやり方で、例えばI-Oなども少しずつ手探りでやっていったということですよ。

長田 そうですね。そのころは行政管理庁が、各省庁の産業連関関係の統計作業を統括していたのです。だから、これらの省庁のいろいろな方から話を聞いたし、そういう方にインドネシアやタイにも行って指導していただいた。

——では、最初は日本のやり方を勉強して、各

国、今われわれが内生国と言っている国の国内表を作らせたということから始めた、その段階に入られたと。

長田 そうです。

——たしか、対象国全部を合わせた10カ国表ですか、あれができたのは1983～84年頃ですね。それを作るにあたってはまず各国の国内固めをした後で、次のステップとして10カ国表を作ったということですね。

長田 そうなのです。ですから、国によって国内表作成に濃淡がありました。フィリピンやシンガポールには、もともと現地の産業連関表があったのです。インドネシアやタイはないので、わりと日本と同じような作り方をした。シンガポールの場合は、統計局との合意がかなわず、こちらで作ったけれども、向こうも作っているという、少し不思議な状況がありました。

どちらにしても最終的には国際産業連関に持っていくために、接続の部分を同じ様式にしなければいけない。同じコンフィギュレーションにするために、すでにI-O表があるところでも作業が必要だったということです。インドネシアでは、最初の産業連関表を中央統計局ならびに中央銀行と一緒に作りました。インドネシア最初の産業連関表としては、1969年に金子（敬生）先生が作ったものがあるのですが、それは基本的にフィリピンの投入構造を借りた簡易表でした。いわゆる本格表として、統計データから積み上げたのは、1971年のインドネシアの表が最初です。

アジアの各国表は貿易マトリックスでつなが

れているのですが、この部分はアジ研が強いところでした。AIDXT（アジア経済研究所の貿易統計検索システム）を持っていたから。このアジアの各国表に、日本とアメリカの表をも接続したということです。そのときに理論的な部分でコアになったアジ研の人たちは、例えば山下彰一さん^(註5)はじめ、欧米で学んで帰ってきた人たちです。

I-Oプロジェクトの後、同じようなスタイルで実施された事業が、ELSA（Econometric Link System for ASEAN. 経済構造予測事業、1981-84年度）です。ELSAは坂井さんが、クライン（Lawrence R. Klein. 当時ペンシルバニア大学）とアダムズ（F. Gerard Adams. 当時ペンシルバニア大学）のところで勉強して戻ってこられて、プロジェクトを始めた。これも大型プロジェクトで、その後、毎年、年末恒例でアジア各国の経済成長率予測を発表するようになった。ですから、ますます社会に研究成果を発表するという責務が出てきている。

——2番目の大型プロジェクトというのは、そういう位置付けになるわけですか。

長田 そうですね。ELSAも最初の4年間はモデル作りですね。各国のモデルを作って、つないで。ちょうどそのころ、京都大学も同じようなプロジェクトをやっていました^(註6)。

——ああ、市村（真一）先生^(註7)のところですか。

長田 そうです。アジ研はその後、国際リンクモデルでいろいろな分析をしたのですが、同時

にその各国モデルを使って予測をした。予測をするときには、その国の事情がわからないとできないというので、統計部だけでやるのではなくて、動向分析部の知恵を随分借りた。また、経済成長調査部の人たちの協力も受けた。

ですから、わりと学際的なアプローチがとられた。アジ研のなかで、以前は地域研究と分野別経済研究にアプローチが分かれていた時期があるし、動向分析も独立していた時期がありました。所内のリソースをうまく使うという意味では、総合的・学際的な試みがされたということです。特に ELSA ではそういう感じ。長期予測の ELSA が一段落したところで、今度は短期予測をやろうと、そのころ理事の小林さん^(註8)が発案しました。彼は経済企画庁から来られた方です。それで SEPIA (Short-term Economic Prediction in Asia. 景気予測事業、1984-90 年度) が始まったということです。ですから、そのころは SEPIA と ELSA が同時に走っていた。

景気動向指数 (Diffusion Index: DI) は誰も作成経験がなかったので、経済企画庁の人たちや日経センターの野村 (信広) さん (当時日本経済研究センター)、あと大学の先生としては京都の森 (一夫) 先生 (当時同志社大学経済学部) に指導を仰ぎました。あと言い忘れましたけれど、ELSA だと木下宗七先生 (当時名古屋大学経済学部) ですね。いろいろな方に協力していただいた。また、SEPIA と ELSA、統計部の人たちはほぼ同じ国を担当するような形でやっていました。

ちょうどそのころが、みなさんがいろいろ苦労した時期だったみたいですね。

——私は SEPIA の最後の、長田さんが辞められる年に入ったのです。ELSA も本体はすでに終わっており、モデル維持研究会も最終年である次の PAIR (Projections for Asian Industrializing Regions. 2001 年アジア工業圏の経済予測プロジェクト) に組み換える予算要求をした年です。

——ELSA や SEPIA という大きなプロジェクトを立ち上げる時、誰がメインのアイデアを出したのか、何が原動力だったのかというのは、何かありますか。単に前のプロジェクトが終わってしまうから、何かを考えついでということなのか。

長田 やはり、僕たちの少し上の統計部の団塊の世代の人たちは元気で、しょっちゅうみんなで飲んでいました。飲みながらいろいろな話をしていました。そこでいろいろなアイデアが出てきた。

ただ、実際に採用されたテーマというのは、うまく時代を反映していたのではないかなと思います。ちょうどアジアの経済が発展する時期には、いわゆる地域研究による定性的な部分だけではなくて定量的な部分が必要だということで、産業連関分析を可能にした。その後、東アジアが高度成長期に入りつつあるときに ELSA で成長予測をした。ついでに短期予測や景気変動は、クォーターリーで発表していた SEPIA の景気動向指数でみるということで、1990 年ぐらいまでは先を読んだプロジェクトだった。そういうのがどこから出たかというのは、先ほど言いましたように、少し上の人たちが飲んでいて、話が出てきたという感じですが、おそらく上の人たちは、通産省の人たちともよ

く話をしていたと思います。だから、そこでも、そういう要請があったのかなという感じはします。ある程度、意見調整ができていないと、大きな予算はつかないので。

——私も回顧してみると、長田さんや長田さんの上の世代というのは、自分たちの専門はあるけれども、そのほかのところにアンテナを広く張っていたなという印象を持っています。世の中の、何というか、要望みたいところに、われわれよりも非常に敏感なところがあったなということは思います。われわれの世代になってくると、専門、専門とは言いますが、何か大事なときに閉じこもってしまうような感じがあるように思うのです。

長田 僕も閉じこもる方ですが、やはり僕らの上の世代は、経済成長調査部でも、野原（昂）さん（後にアジア経済研究所理事、二松学舎大学教授を歴任）とか林（俊昭）さん（後にアジア経済研究所理事）とか、元気な人たちがたくさんいた。それでいろいろなプロジェクトを思いついては、みんなで議論していたのです。

——組織を大きくすることを経験した人たちが、まだたくさんいたということなのですかね。

長田 そうですね。統計部の研究のスタイルというかプロジェクトスタイルは、ある意味で時代を先取りしていたと思います。今、大学などでもわりと大きなプロジェクトを同じような形で、国際ネットワークを組んでやっています。けれども、プロジェクトの渦中にいた者としては、大変だったという思いがあります。むちゃ

くちゃ忙しかった。アジ研のなかで統計部は、いわゆる飯場みたいな現業部門で、経済成長調査部はもう少し上品に研究ができてというような感じで、うらやましいと思ったこともありましたね。

——SEPIA に関しては最後の年だけ参加しましたが、何だかわからないうちに、四半期ごとに何か出すというので、計算を回すだけのことはやりました。けれども、あれはまったくわからないでやっていたといってもいいぐらいなのです。

景気指標といえば、2年ぐらい前に、アジアの景気循環だとか、SEPIA のころのものをみて、ちょっといじってみようかなと思ったのです。当時のソフトなどもう当然動かないわけですが、エクセルなどでも系列を引っ張ってきて、季節調整をしてみて、DI ぐらいだったら作れるだろうと思って。ところが、まず何を表しているのかわからない系列の名前だとかがあったりして、結局うまく行きませんでした。そして、1980 年代のあの当時、マレーシアやインドネシアといった国で、DI の構成項目をみつけたというのは、ものすごいことなのではないか、とそのとき感じたものです。

長田 すごくかどうかはわかりませんが、韓国の場合はどうでしたか。

——DI の 11 項目でしたか、それが完全分解できたって、僕のところにわざわざ 5 階に下りてきて、教えてくれたことがありましたよ（当時動向分析部が 5 階にあり、長田氏がいた統計部は 6 階にあった）。あれは長田さんがなさったので

すよ。

長田 そのやり方も経済企画庁の方たちに習ったのですけれど、とにかくヒストリカルDIと
いうのをまず作って、それとうまく合うような
系列を探すということですね。

——系列探しについて相談してもらったことが
ありました。どの系列だろうかとって、10
個ぐらい持ってこられて、おそらくこれとこれ
ではないかというようなことで。

長田 そうやって似たようなグラフが描けるも
のを探していくことをやったのです。けれども、
今だと、もう少し統計的な手法で同じようなパ
ターンを描くものを探せると思うのです。あの
ころはわりと泥臭いやり方でやっていた。

——目でみてという感じですか。

長田 ええ。だから、かなりアバウトな部分が
あって。

——僕が覚えているのは、原系列をみて、これ
はおそらく主軸はこれだろうというのを2つぐ
らい出して、次に残差をみて、残差にまた
フィットするものをまた入れてみて、というこ
とをやっていたと思いますね。

——私の記憶だと、プログラム改訂前の最初の
頃は、コンピューターのアウットをみて、
前の月と比較して今月は上がったかどうかを確
認して、それを手作業で集計して行って、それ
で判定していったように思えるのです。たしか

四半期で、予測結果を出すようになったのは、
2年目かそこら辺ぐらいではないかと思います。

長田 そうですね、少したってからですね。

——最初に先発国、インドネシアやシンガポ
ールを始めて、あと後発国でたしかフィリピンや
マレーシアをやり始めたんじゃないかしら。

長田 1984年から3年かかって、DIを一応開
発して、87年から四半期ごとに発表したのだ
す。ただ、SEPIAの方は、結局、需要がそん
なになくて、1990年でやめましたね。

——そうですね。そこが完全に最後です。
ELSAの方はそれよりちょっと前ぐらいに終
わっていて、経済構造予測維持研究会という、
1～2年は、そういうつなぎのようなものが
あって、その後でPAIRを立ち上げたのです。

それから、最初SEPIAで共同研究から始め
たものだと思うのですが、マレーシアでは
MIER (Malaysian Institute of Economic
Research. マレーシア経済研究所) がいまだに
DIなどきちんと出しています。そういう形で
種をまいたものを、現在までやっているのだと
思います。

長田 DIに加えて、ビジネスサーベイもやっ
たのです。いわゆる日銀の短観をまねして。シ
ンガポールではそれが残りましたよね。シンガ
ポール大学のチャオ先生が、ずっと定年になる
までやっていた。

——MIERは、たしかビジネスサイクルとビ

ジネスサーベイみたいなこともやっていたと思います。毎月だったか四半期に1回だったか、薄い何ページかのものを何種類も今出していますけれど、そのなかにあったような気がします。おそらくおもとは、アジ研と一緒にやったものではないかと思うのですけれど。

——今だとだいぶ改良されたかもしれませんが、あのころは途上国の統計といっても、そんなに早く公表されなかったと思います。それから、DIの予測期間というのは、大体向こう半年ぐらいなので、例えば3カ月前や2カ月前の原統計が今出てきて、それを加工して、さらに1カ月ぐらいたつと、先行指標はあまり先行しなくなってしまう。今みたいに統計が本当に頻繁に発表されるようになったら、もう少し、あのようなDIには、需要があったと思います。

長田 やはりSEPIAも各国にカウンターパートの機関があったわけで、そこが発表する前に、早めに指標のデータをもらっていましたよね。

——それは郵便ベースでもらっていたのですか、それとも何かほかのものでしょうか。ファックスはなかったですね、まだあのころ。

長田 郵便だったような気がします。1週間ぐらいで来たでしょうから。

——最初、郵便でしたね、いろいろとやり取りするのは。

長田 思い出話になりますが、一番最初、産業関連プロジェクトで、海外のカウンターパート

の機関に研究費を送るときは、日銀に行きまして、海外送金許可願というのを申請したのです。当時は外貨を送るというのは、自由ではなかった。

——為替管理制限。

長田 そうです。もうひとつ、統計部的なやり方の大型プロジェクト要求の裏にあったのは、公務員の定員削減の流れです。毎年アジ研の定員が1人とか2人、カットされてくるわけです。といって、生首を切るわけにはいかないので、新規プロジェクトを立ち上げて、人員も新規要求するわけです。例えば年額5000万円ぐらいプロジェクトを獲得すると、1人分新しいポストがついてくる。

統計部において、僕にとって良かったことですが、初めは統計作業ばかりして覚えることも多くて、楽しくないことが多かったのです。また、貿易の研究会にもなかなか参加できなくて、ちょっとフラストレーションがたまっていました。それでも我慢してやっていくにつれて、それが役に立つようになった。僕などは一番アジ研で育ててもらった方だと思っています。貿易や経済発展の研究には、統計を使った分析が欠かせませんが、その統計の作り方がわかった。だから、使い方もよくわかるというメリットがある。おまけに産業連関表など、なかなか当時はまだ使われていなかったりソースにアクセスできて、それが分析に使える、計量経済モデルも使えるということで、いろいろなことを学ばせてもらった。

同時に今度は、後で話になると思いますが、経済成長調査部のいわゆる貿易研究会に何年か

してから加えてもらって、自分の興味があることを勉強できるようになった。経済学を使ってディスカッションするグループに入れてもらい、いろいろ学ぶことができたわけです。だから、理論と統計のリンクができた。

もうひとつメリットがあったのは、SEPIAを通して、あるいはELSAの予測を通して、動向分析部の人たちや調査研究部の人たちと話をする機会が増えた。開発論などをテキストブック的に習うと、ともすれば途上国を全部同じイメージで扱ってしまうわけですけど、実際には国ごとに与件や制度が違うわけです。それを考慮した上で、経済分析するのが本筋なわけです。それをいちいち自分でそれほど勉強しなくても、動向分析部の人なり調査研究部の人が教えてくれる。門前の小僧と同じで、耳学問で結構どういう方向が正しいかということぐらいはわかるようになる。よくわからなくなったら聞きにいけばいい。ということで、地域研究のアプローチだけがすべてではないと思っているのですが、途上国研究ではそういう発想もないと、本当は分析できないのだということがわかりました。

私はインドネシアを主な研究対象国にしましたが、アジア研には非公式なインドネシア研究会というサロンのような集まりがあったのです。アジア研には、たまたまインドネシアを研究している人が多くて、いろいろな分野の人がインドネシア研究会に出て発表するわけです。そこでいろいろなことがわかるし、情報の交換もできる。また、インドネシアのヒューマンネットワークまで使わせてもらえた。たまたま統計部にいたために、どこにも所属していないというか、いわゆる地域研究あるいは経済アプローチ

という分け方のところに所属していないために、うまいことアジア研のリソースを僕自身は使うというか、学ぶことができたということで、感謝しています。

——動向にいた人たちも、おそらく統計の人たちとアプローチするときにはそのようなことを感じていたと思います。彼らは新聞を読んで全部を知っているような顔をしていますけれど、数字でクリアカットに切るということは、やりたくてもできないし、ノウハウも今の人たちに知らなかったというのがあったから、実はすごくメリットがあったと思います。自分がその動向分析部に入ってから、やはりそういう声がちらほら聞こえてきたのは事実です。

長田 動向分析部も最初はすごいアドバンテージがあったのですよね。個別の途上国をよく知っている人は日本に少なく、しかもテレコミュニケーションが今のように発達していないわけですから、何かが起これば、動向分析部の人にテレビなどのインタビューがあり、すぐに解説ができたということです。

しかし、今はテレビもすぐ中継するし、現地の人にもインタビューできる。そうすると、やはり動向分析部の人たちも、その国の直近の動きだけではなくて、そこにある大きなメカニズムを理解しないと気の利いたことが言えないということが理解されて、だんだんやり方が変わってきたのだと思います。

III 貿易研究会での活動

——では、今お話しになった貿易の方のことも

伺えればと思うのですが、最初に入ったきっかけは、どういうものだったのですか。

長田 貿易研究会ですか。よく覚えていないのですが、当時は野原さんや米田（公丸）さん、鈴木（長年）さん、柳沢（雅一）さんがメンバーでした。野原さんも、私にとってシニアではありますけれど、ほかの方に比べるとわりと年が近いので、時々話す機会がありました。そして、「おまえ、貿易が専門なら一緒にやろうぜ」ということを言ってもらった。僕も「やらせてほしい」と希望しました。

本格的に貿易の研究会に参加するようになったのは、平田さんが来てからです。平田さんがアジ研に入って、最初の1年だけ、統計部で貿易統計を担当していたのです。ですから、そこで仲良くなって、「同じ専門分野だね」と話していました。平田さんが経済成長調査部に移って、貿易の研究会の幹事などやるようになると、いつもの野原さんと平田さんのコンビに、僕も入れてもらってということだったですね。

1970年代は結構、貿易の研究会は頑張っていたというか、経済成長調査部のなかではわりと派手にいろいろやっていたと思います。それには時代の背景もあって、1960年代から70年代にかけて経済発展論というと、国内政策よりは対外発展政策をどうするかという話が焦点になっていたからだと思います。輸入代替から輸出指向へという議論ですね。神戸大学では、村上（敦）先生と池本（清）先生が両政策の優劣を議論され、注目されていました。だから貿易と発展という分野は、結構、光が当たるところだった。ちょっと手前味噌の偏見かもしれませんが。

それが徐々に変わってきて、1970年代末の経済成長調査部では、マクロ経済、農業、工業、金融、貿易という各部門をそれぞれ重視する研究の枠組みができ、それぞれが活発な研究をするようになったと傍目にはみえました。30年史（『アジア経済研究所 30年の歩み』1990年）にも書いてあるのですが。そのころになると、途上国経済も発展してきて、国内経済運営のあり方が重要となり、金融もみななければいけない、工業もみななければいけないというようになりしました。それと比較して、対外政策を中心にぎっくりと国の経済全体をみていたということで、貿易研究会は面白かった。

いろいろな方が研究会に参加されました。野原さんがずっと後見人というか、要でいたわけですが、実際に幹事として研究会を動かしてきたのは平田さんです。彼は残念なことに、49歳で亡くなりました。昨日、追悼論文集^(註9)を読んでいて気が付いたのは、あの研究会は、今思うと、貿易政策に関しては後に一流となる人たちが主要メンバーだったということです。しかも、その人たちが若いときです。これらの方々の参加を得られたのは、みんな平田さんの縁なのですね。

一番長く主査をやられたのは山澤先生^(註10)で、山澤先生も平田さんと以前から研究上のご縁があった方です。平田さんは慶應の深海（博明）先生のゼミの1回生のようなのですが、委員として入ってきたのが深海ゼミの後輩たちですね。いつも貿易研究会に、コアメンバーとして来ていたのは小浜裕久さん（静岡県立大学）、浦田秀次郎さん（早稲田大学）。木村福成さん（慶應義塾大学）も若いときに来ていた。それから、後にOECDで活躍された深作（喜一郎）さん。みんな

な深海ゼミつながりです。それに渡辺利夫さんが時々参加したり、ということで、今から考えると、本当にすごいメンバーがいたものだと思うわけです。

あの貿易研究会は、みんな個人的にも親しいので、忌憚のない意見を言い合っていた。そういう点で、内容のある楽しい研究会でした。野原さんも追悼論文集に書いているのですけれども、ここでの新しい試みは、日本だけで固まってしまうのではなくて、貿易研究会を、国際ネットワークでやったということです。平田さんは日本（アジア研）に加え、イギリス・アメリカという三極の途上国貿易を研究している機関と組んで、それぞれの先進地域と途上国との関係の政策について研究して本にまとめた。産業調整もそうですし、貿易政策もそうです。だから、そのやり方はネットワーク型研究であると、野原さんは書いています。

貿易研究会のテーマは、いろいろと変わっていきますけれども、その時代の貿易に関する大事な課題を扱っていた。そのなかには、中国で無許可翻訳の海賊版が出た本もありました。輸出指向工業化の話^(註11)です。野原さんが海賊版をみつけてきて、翻訳して出版した人と連絡を取って、何十冊か現物をもらって、それで著作権料をもらったことにしたという話です。

研究会では、山澤先生などいろいろな人たちが、コアになる全体的な議論をまず組み立てて、みんなでディスカッションします。それを半年ぐらいやるわけです。その後、ではこれを個別の国に適用したらどうなるかということを考える。アジア研の人たちはそれぞれ専門地域があるわけで、メンバーがそれぞれの研究対象国について同じような分析をしていく。それから、国

間比較が必ず含まれる。本としてはそういうスタイルの構成がわりと多かったような気がします。クロスカントリーのアジア全体の分析が最初にあって、あとは国ごとの分析をして、それでまとめがくる。

Ⅳ 研究の場としてのアジア研の特徴

——本来、国をまたいだ大枠の話というのは一国の研究者はわからないから、そこから始めるのは結構つらいのです。しかし、当時の貿易研究会では、一流の先生方から大枠を示されて、これで切ってみたらどうかというヒントが渡される。それが当たるか当たらないかは別としても、それを出発点に調べられるから非常に楽しだし、それまで誰も知らなかった結果が出てくるわけで、仕事をしていてすごく楽しかった。今はそういう大枠を示されることもあまりなくて、個々の研究者が全部任されて自由にやっているけれども迷うことも多くなった。案外良くないかもしれないですね。

長田 やはり大枠を作るところで、例えば山澤先生なり、浦田さんなり、平田さんなりが、ぼんと出してきた案に乗るのではなくて、みんなで結構たたいたですね。その間にこちらも理解するし。だから、とにかく楽しい研究会だった。

——会議というものを、有機的にというか、実りのあるものにとすることを、よくわかった方々だったなと思います。わざとを考えてそうしているというのではなくて、なぜかそのようになるのです。今だと、負担だとか、時間を取

られたとかという話にどうしてもなってしまうのだけれど。議論は毎回、毎回、それぞれで少しずつかみ合う部分があるから、半年もやっていると、かなり大きなものになるのですよね。

長田 みんな忙しい人たちで、次の予定があるので、予定時間内に効率よく話をしなければならぬ。ですから、あまり余計なことは言わないし、また、何か変なことを言ったら、すぐ遠慮なく却下された。

——ただ、今でも思うのは、長田さんたちが公刊された本は、貿易研究会の本にしても、SEPIA の成果をまとめた長田博・平塚大祐編『アジアの成長循環』（アジア経済研究所 1992 年）にしても、総論や各論も揃っていて、よくまとまっていて、本として読みやすいと思いました。みんなひとつの研究会で、まとまってやっているなという感じがいたします。今はなかなかそのようなまとまりのある本を作るのは難しいのです。研究会といっても、各人が何か書いていっている感じで。

——今は、成果主義というものが幅を利かせるようになり、みんなで仲良くという雰囲気なくなっちゃった。「これはおれの取り分」というところを明確にしようとしすぎるから、昔みたいなやり方は、もう難しくなったのかという印象を持っています。

長田 それはおそらくアジ研だけではなくて、大学もそうだし、成果で評価されるので、あまりお人よしでは生きていけないというのはありますけれどね。

私は、アジ研から出版される関連分野の本の宣伝にはある程度注意しているのですが、最近のものは以前より増して、読みたいなという本があります。先を見越して課題を設定して、研究会をしているのだなという感じはします。だから新聞などでその問題が注目されるようになってきたころには、もう本が 1 冊出ているというような感じがあって、それはすごいなと思う。

今はどうなのかわかりませんが、昔の研究会の運営方法で物足りないことがあったとすれば、主査の多くが外部の先生だったということです。今はもう内部主査で動いていますかね。

話は変わりますが、僕は 1980 年ごろアメリカに 2 年間研修に行かせてもらったのですが、戻ってきてまだ各国 I-O 表の国際リンク作業をやっていました。向こうにいる間に坂井さんから、「新しいプロジェクト（ELSA）を始めるので、おまえも帰ってきたらやるのだよ」という手紙が来た。それまで、エコノメ（計量経済学）からは逃げていましたから、困ったなと思った記憶があるのですが。

——僕は長田さんというと、エコノメトリシャンであると思っている。僕は研究所の仕事での計量の使い方を直接教えてもらった関係があるので、そう思っていたのですけれども、アメリカに行っている間に、その辺は随分習われたのですか。それともその前からもやっていたのですか。

長田 いえいえ、戻ってきてからです。実際の推計作業をやりながらの、on the job training です。

——そうですか。

長田 もともと数学は強くないので。強くないというか、弱いので。横山（久）さん（アジア経済研究所を経て津田塾大学）など福地（崇生）ゼミ出身の人たちがいますよね^(註12)。あるいは、坂井さんはもともと理系だし。ああいう人たちと比べると、全然数学ができないので。微分も、一生懸命本をみながらやっている。だからエコノメも戻ってきてから、仕事なのでしょうがなくて覚えたのです。アメリカに留学中に、授業である程度、習ってはいましたけれど。

——私は学部から入りまして、いきなり統計部だったものですから、手探りでやらざるを得ないところがあったのです。統計部でも時々、作業会議みたいな形で、何か勉強会みたいなことをやっていましたよね。そういうのがあったのは良かったなど。

長田 統計部の勉強会をいつも引っ張っていたのは坂井さんです。坂井さんがアメリカから戻ってきてから統計の勉強会を開いて、そこで英語の統計学の本を輪読した記憶があります。その後も、折に触れて、ホワイトボードに数式モデルを示されて、「どうだ」と聞かれるのです。馬鹿にされないように議論についていかなければいけないので、こちらも勉強したけれども。いまだにこの関係は変わりません。

——僕はアジ研に来たとき、最初はアルバイトでした。統計をいじる仕事をしろと言われたが、テクニクについて原局^(註13)は何も教えない。一番最初から、長田さんに聞けといわれて、出

入りしていたのを覚えています。とてもたくさんの方のことを教えていただいたという記憶がある。研究者だから、さぞかし難しいことを言われるのかと思ったが、ある結果を出すために必要な筋道というのを、非常に懇切丁寧に手取り足取り教えてくれた。このことを、今でも非常に感謝しているのですよ。

長田 それは自分ができなかったので、いろいろ苦勞するなかで簡単な教え方がわかってきたということですね。

——そういうことなのですかね。僕の返答を1回聞けば、もう僕が何をわかっていないのかということも、わかっていらっしゃるのです。例えばモデルを作って、「ここでつまづいているんです」と聞きにいくと、「ああ、ここね。ではこうして」とか、「ここにデータがあるから取ってきて」ということを、全部教えていただいたのを非常によく覚えています。

長田 植村さんは、計量経済学が専門だったわけですね。

——専門といっても、モデルはやったことがないし、もっと別な多変量（解析）をやっていたので、やはり入ってきたときには、本当に、長田さんと吉野（久生）さんに、WEMS^(註14)の使い方を教えてもらったのです。小島（道一）さんと2人で同期に入って、最初にマレーシアとタイを選べと言われて、私がマレーシアを選んで、彼がタイを選んだのです。

そのときに、まったく偶然でマレーシアを選んで、それでモデルをやることになりましたが、

まだ WEMS も全部コマンドを打ち込んでやらなければならない、画面から選ぶ WEMS 2 がない頃でした。APL そのままみたいなものだったのでしょう。一体何をやっているのかというのが理解できていませんでした。そのころでも SEPIA の方のソフトは、ある程度選びながら入れられるようになっていて、結構ユーザーフレンドリーだったのですが、ELSA の方は、数字や変な (APL) 記号を間違えないで入れていかないと、ちゃんと動かないというものでした。

——そうですね。変な演算記号で、アンドマーク (&) を入れなければいけないなど、ラグや関数名を入れるとき、たしかアンドを使っていた。

長田 ELSA の計算は、結構大変なソフトが必要だったわけです。リンクモデルを動くようにするためには、いろいろな開発が必要で、IBM と組んだのですよね。IBM の研究所の方たちが参加してくれて、やったのです。あれはちょっと、今ではあり得ないかもしれないけれど。

——たしか白っぽい B5 ぐらいの形で、IBM とアジ研が一緒にやったというような、ELSA のソフト開発の経緯が書いてあるようなものがありました。

——あのころは良くも悪くも大変、労働集約的だったということがあるから、人に何か伝授しないと、あまりにやることが膨大すぎて、やり切れなかったということがあったのではないで

すかね。アルバイトはたくさんいたし、職員も多かった。仕事をやる上でたくさんのことを共有しないといけなかったことが、あったような気がしますね。逆に今、便利になってしまったから、人と話をしなくても、できるようになってしまった。

長田 しないよね、パソコンのソフトで全部済んでしまうので。

——あのころはメインフレームだったから、同時に I-O が使っていると (重くなってしまって) なかなか動かないとか、何かそういう頃だった。

——アナログ的な。

——何かアナログ的な。それと、メインフレームが比較的空いている時間はどの時間帯か、とかね。

長田 想像できないと思うのですが、僕が入って最初 I-O をやった頃です。逆行列の計算がありますよね、「50×50」の行列で 20～30 分かかったと思います。今なら PC でもあっという間に結果が出ますよね。そんな時代ですからね。

——こういうの (手で回すの) はやりましたか、タイガー計算機というのは。

長田 それはさすがに私の世代では使わなかったですけど。

——実は今にして思うと大変だったと思うのですが、長田さんご自分の研究もやりながら、

統計部のプロジェクトのまとめ役としてやられていたと思うのです。

長田 外からみると、統計部のやってきたやり方は、時代の先を行っていたとか、逆に言うと、今大学で結構ああいうのがやられていて、先生方が忙しくて困っている。研究費を取ったら成果を出さなければいけないというのも一理あるけれど、やはりアジ研のようなところは、基礎的な研究が強いとか、そこがないと、ほかに対して比較優位 (comparative advantage) がないと思うのです。

例えば開発協力政策などの分野では、以前のJBIC、今のJICAの円借款を担当しているところは、マクロの政策対話などについては蓄積がある。そういう実務がらみの研究をやっている機関は結構あるが、アジ研はこの面ではあまり組織としての蓄積はない。

それから、各国の事情みたいなのは、今ではやっている人が多い。したがって、やはり経済、社会、政治、制度の基礎のところがあった上で、最近の動向も知り、長期的な視点をも含めた洞察的な物言いができることが大切です。別の言い方をすれば、歴史観を持っているとか、それを養っていないと、アジ研らしい深みがあるものは出しにくいだろうと思う。だから、あまり忙しいのは良くないと思う。

——今までELSAや貿易の話がありましたけれど、ご自身でこれが自分としては一番良かったと思う仕事を、もし挙げるとすると、どれになりますか。私はやはり長田さんがインドネシアについて書かれたものが、一番面白いなと思ったのですが、その点は振り返って何か

ありますか。

長田 いわゆる地域研究でもないし、貿易理論のある特定分野ということでもないのです。経済発展と貿易政策の接点に興味があって、それに加えて、インドネシアに興味があるというのが自分の分野だと思っています。昔からそのように思っているというよりは、アジ研の仕事に携わるうちに、そうなった。だから、あまりまとまった研究もしていないですけど、インドネシアについてはいろいろな分析をかじっています。大学に移ってから、アジ研からの委託研究としてしばらくAPECの研究をやりました。

僕が大学で所属しているのは国際開発研究科なので、貧困削減をテーマとする研究が結構はやっています。1990年以降、Pro-Poor Growthという言葉が出てきて、その辺にちょっとかみついて、今やっているのですけれどね。マクロ的にみた貧困削減策です。貧困削減というと、セクターアプローチが結構多いので、マクロでみて何ができるか。いわゆるTrickle-Downは否定されてPro-Poor Growthになりましたが、では具体的にどういうことが可能なのかという、そこがあまりできていないと思っています。そこで、マクロモデルと貧困家計モデルをつなぐことをやろうと思って試みたのですが、まだあまりうまくいっていないですね。いわゆる貧困研究は、家計調査データを使ったマイクロアプローチが今はすごくはやっていますね。澤田 (康幸) 先生 (東京大学) や黒崎 (卓) さん (アジア経済研究所を経て、現在、一橋大学) がやっていますよね。それとは違って、いろいろなマクロの政策が、どのように貧

困に影響しているかを、ちょっとやっていたのですけど、あまりいい結果は出ていない。

——今もマクロでアプローチをされていることのなかに感じている良さは、何ですか。

長田 最近のマクロモデルを使うと、いつも批判されたり、いろいろ言われるので、ちょっとつらいのですけれど。今は世の中 CGE (Computable General Equilibrium Model. 一般均衡モデルの均衡解を現実の統計データから計算できるようにしたもの) が全盛で、CGEの方が理論的にもいいといわれています。しかし CGE はちょっと難しく僕自身はモデルを動かせないのです、今もマクロモデルでやっていますね。

差分でモデルを作ってもいいけれど、そうするとなかなか理解がしにくいし、説明がしにくい。結局、同時推定バイアスはあるけれども、OLS でやっても推定結果にそう差がないのだということを言い張りながら使っています。マクロモデルのいいところは、与件の変化の波及チャンネルがよくわかることです。どの変数が、どのように他の変数に影響を与えているかという。それがよくわかるので、ある政策がどういうチャンネルで経済に影響しているかというのが、よくわかる。逆に、CGE だと、方程式の本数が多すぎて、どうなっているのかわかりにくい。そんなわけで、批判されながらも、マクロモデルを使っているのですけれど。

——まさにそのところですよ、われわれが今やっているのは。

——せっかくあんなにすごい努力をして作った

マクロモデルがメンテナンスをする人がいなくて、データも更新できない状態なので復活させようとしています。もちろん、前みたいに毎年、記者発表に追われるのではよくないので、そのときの重要な開発のトピックと絡めて、モデルを使った研究会を長い目でやってみたらと言ったら、わりと研究所の上の方は評価してくれたようです。やはり昔の統計部のやったことは、今は I-O が続いていますけれど、先見の明があったのではないかと考えているのです。

実は今日、長田さんに来ていただいたのは、アジ研の統計部のやった仕事は、今はあまり振り返られないけれど、時代の先を行くものがあったのではないかと思ったので、それだと思ったのです。

それから、先ほどお話のあった貿易の研究会で、今の開発問題をやっている人たちの、本当にビッグネームの人たちが参加していたのだということを、やはり 50 周年のときに書いておきたいなと思ったものですから、そこのところを知っている方ということで、長田さんに伺ったのですけれど、本当にそうだなと思いました。

長田 まあすごいですよね。今や浦田さんもすごいし、木村福成さんも。今、理論的にも実証的にも面白いところをやっているのは、木村さんですよ。マクロモデルは、やはり私は好きなのですけれど、統計理論的に批判をどうかわすかというのは、つらいところで、いわゆるエコノメトリシャンとしてマクロモデルをみると、いろいろ問題が出てくる。けれども、実際には途上国の統計データがあって、データの精度が、統計の手法のエラーより大きい小さいかということ考えた方がいい。

あとはCGEとの比較で批判されるのであれば、CGEのパラメータを突っ込むのは、あれは何だということも言えますよね。パラメータもarbitraryに作られているケースが多い。また、マーケットが結構パーフェクトに動いているようなときはいいけれど、何か不連続なことが起こっているときは、マクロモデルの方が、アド・ホックな対応になりますが、対処しやすい。やはりマクロモデルのいいところは、もちろんアジ研で予測に使っていたわけですが、予測した数字が導かれるまでのストーリーが語れるということなのです。

だから、推測された数字自体にそう厳密にとられる必要はなくて、何か変化があったら、結果として物事がどちらに振れるか、そして、そのおおよその大きさがわかるということが大切です。ポイントは経済全体がどのように動くか。今、学生さんたちをみても、すぐ細かい特定の分野に行ってしまう傾向がある。マクロを押さえた上で、特定の分野をやらないと、本当のことはわからないですよ。

——予測をやっていたときのモデルですが、もう丸2年ぐらい全然いじっていない。自分が直接担当していたマレーシアなどは、ある程度メンテナンスしていますが。予測をやっていた頃は、少なくとも予測をする直前のところまでを完全に固めておかねばならないということでした。そこは、強迫観念というか、そこまで固めないと、その次のことはできないのだということがありました。

だから、今後モデルで予測はやらない、ああいう発表するようなことはしないとは言いがく、でも年に1回ぐらいは予測作業をやること

によって、(モデルやデータを)最新の状態に置いておけるんじゃないかと思う。トヨタが今年度F1から撤退してしまうという報道がありましたが、常にそういう状態に置いておくためには、レースに出つづけるというようなことは必要なのではないかと痛切に思っている。モデルも2年ぐらい放っておけば、また人が代わったりすれば、もうモデルもデータも、何だかわからなくなってしまうですね。それが怖かったので、今年総まとめをやってみようかという話になったのですけれど。

長田 自分でモデルをしばらくいじらない場合も、同じことが起こりますね。僕はインドネシアモデルを持っていますが、何年か放っておいたら、だんだんわけがわからなくなってきました。

——そうですね。そういう意味では、数年後の自分って他人なのですね。やはり直接手がけていたところ以外は、本当にわからないし、みていたところでも数年たってしまうとよくわからなくなる。

——マクロモデルというものの自体が、過去の統計から導き出すものだから、その統計の裏にある事実を押さえていないと、長田さんが今言ったストーリーテリングができないということがある。だから、実は長田さんが、その前にも言った歴史を踏まえることが強制されるインストールメントだと思うのです。

長田 だから、特に地域研究というか、そういうことをやってきていない人には、すごくいい

トレーニングになるのですよね。1年に1回それをやる。例えば韓国モデルをやったときには、韓国を研究している人に話を聞きに行く、それで新しい情報が入ってくるし。

——私も統計部で、マクロモデルをやったり、景気動向指数を作りました。そうすると、国民経済計算のデータなどを読むことになるのです。この表のこの数字と、全然別のこの表の数字とは、実は合っていないとはいけなくて、整合性が取れなくて、この数字はどこにつながっていて、などというのが何となく慣れてくると、読めなくてはいけません。そうすると、輸出のこの部分の数字は、国内でこうつながっている、と何となく配線ができるというのがある。

そこまできると、いろいろな新聞記事やデータのグラフなどをみても、何となくわかるというか、何が起きているかがわかる。そこまできると、地域の研究も面白くなる。そういうことなのかなと思っていて、だからそういう機会を、学生さんも持った方がよいと思います。修士課程の人でも、早くから論文を書け書けと、せっつかせているみたいですが、もう少し基礎的な訓練を、学生さんもやればいいと時々思うのですよね。マクロモデルをもう少し作ってみたらと。

長田 今から振り返ると、自分の場合は大学院の博士後期課程に行かず、アジ研に修士で入ってしごかれたことがいい勉強になったとも思います。まあ、古き良きのどかな時代のこともかもしれない。

次に、アジ研と大学の相違点の話ですが、やはりアジ研から大学に行って最初に思ったこと

は、研究環境が悪化したなということです。一番大きいのは、これは仕事なのではないですけど、教育に結構時間を取られる。アジ研はどちらかというと研究だけ。ただ、大学でいいことは、上から頭ごなしにこの研究をやれということは言われない。アジ研の場合は、昔はそんなに言われなかったけれど、今は社会的な要請もあるので、国の政策に関連したことはやらなければいけないかもしれない。だから、気分的な自由は大学の方がありますけれどね。

アジ研の研究環境はよい。特に本ですね、僕なんかは途上国の統計を使うものでその日本一の蔵書もありがたい。統計も、今はインターネット経由で随分取れるけれども、途上国だと最近のものだけで長期時系列では取れない。説明書きがついている統計書でないとあまり意味がないので、やはり学生にも論文を書く前に、「一度アジ研に行ってこい」ということを必ず言っています。そういう意味ではすごくいい。

あとは、昔は海外調査に行けるというのは結構メリットだったのですが、今は科研費で海外調査もしやすくなり、その辺のメリットはあまりない。

V 研究生生活を振り返って

——そろそろ2時間になってきたので、最後の締めくくりということですが、ご自身ですっと研究なさってこられて、もし、例えばやりたかったことというか、挑戦したいことなどテーマをお持ちでしたら、お話しいただければと思います。長田さんが、ぜひやってみたかったテーマや、まとめたい自分のテーマ、まとめて今後やりたいテーマなど、もしお考えがあれば

ということです。

長田 これまで、いろいろなもののかじってきたし、僕自身あまり本を書くような柄ではないので、単発のテーマでいろいろやっていきたいと思っています。

これまでは研究費をもらったら成果を出さなければいけないし、そういうことでやってきたけれど、もうそろそろ定年も近いので、少し自由に考えたいと思っています。たいして研究費は必要ないと思いますが、テーマとしては、やはり研究の出発点であったロストウに戻るのですよね。テイクオフに戻るわけではなく、経済発展の成功条件に戻るわけです。経済発展のプロセスのなかで、政治的な条件や制度的な条件や、あるいは価値基準などがどういうふうに変わっていった、それが経済発展にどういう影響を与えるか。やはりそれをもう一回、立体的にとらえたい。

西洋的なアプローチに少し違和感があるので。それはどういうことかという、世界銀行などの施策をよくみていますと、あるいはJICAもそうかもしれないですが、問題への対応が有機的ではない点です。例えば途上国政府のガバナンスが悪いと判断された場合、考えることは、ガバナンスの向上のための行政官のトレーニングですね。しかし、研修だけで果たしてすぐにガバナンスが良くなるのかどうか。要するに、何て言うか、西洋医学と同じ対症療法的に全部やっていく。世銀的な発想では、それをやれば、すぐ効くようなイメージでやっている。しかし、歴史の発展というのは、やはり人々の心や価値基準が変わっていく時間が必要で、もう少しゆっくり動いているのではないか

と思っています。だから、少しその辺を考えてみたい。

——ガバナンスのトレーニングが効くかどうかという疑問なのか、それともガバナンスを良くするということ自体が効くという、その大きなものへの疑問なのか。

長田 トレーニング自体は一定の効果はあるでしょうが、根本的に効くかどうかということです。それはトレーニングをやって、すぐ変わるようなものなのか。いろいろな諸条件で、結局、人々の価値判断や生き方が変わらないと、ガバナンスは良くならないし、それを、通り一遍のトレーニングで何とかするということに思うのは、楽観的ではないかと思っているわけです。ロストウが言う「近代化していくときに人々の価値基準が変わって」という部分ですが、何が起こるとそのように変わっていくのか。経済発展が起こって、人々の所得水準が上がれば、そのように考え方が変わっていくのか。一言で言ったら、開発論のところにいわゆる近代経済学のアプローチがどんどん入っていつているけれども、もう一回ポリティカルエコノミー的なアプローチで考えたい。年をとるにつれて、そういう気持ちが強くなりますね。

——どうもありがとうございました。

(注1) 1963年統計調査室、64年4月統計部、87年4月統計調査部に名称変更。

(注2) 坂井秀吉氏。アジア経済研究所を退職後、広島市立大学等で研究・教育活動に従事。

(注3) 古河俊一氏。アジア経済研究所を退職後、東京国際大学経済学研究科非常勤講師など

を歴任。著書に *International Input-Output Analysis: Compilation and Case Studies of Interaction between ASEAN, Korea, Japan, and the United States, 1975*, Institute of Developing Economies, 1986 などがある。

(注4) Chow Kit Boey 氏。シンガポール国立大学上級講師などを歴任。

(注5) 山下彰一氏。アジア経済研究所を退職後、広島大学教授、国際東アジア研究センター所長を歴任。

(注6) 東南アジア研究センターを中心に作成されたもので、S. Ichimura and M. Ezaki eds., *Econometric Models of Asian Link*, Tokyo: Springer-Verlag, 1985 として公刊された。

(注7) 市村真一氏。京都大学東南アジア研究センター所長・教授を歴任。

(注8) 小林進氏。1983年4月10日から87年4月9日までアジア経済研究所理事を務めた。

(注9) 『追悼の中の僚友——平田章君追悼論文集——』1997年。

(注10) 山澤逸平氏。一橋大学、早稲田大学等で研究・教育活動に従事、またアジア経済研究所・所長を歴任。

(注11) 山澤逸平・平田章編『発展途上国の工業化と輸出促進政策』研究双書 No.362 アジア経済研究所 1987年。

(注12) 福地崇生氏は国際基督教大学、筑波大学、京都大学や名古屋市立大学の教授を務め、多くの研究者を育てたが、主に国際基督教大学時代に福地氏の指導を受けた人が当時のアジア経済研究所で研究活動をしていた。

(注13) 研究会を統括していた部局のこと。貿易研究会は経済成長調査部が担当だった。

(注14) アジア経済研究所を中心に開発された計量経済分析用プログラムで APL という言語で書かれている。